

〈近世女性史資料(10)〉

百 家 女 今 川 姫 鏡 全
重 宝

— 書 誌 ・ 翻 刻 —

黄 色 瑞 華*1
若 林 俊 英*2

< Early Modern Women's History Research Materials (10) >
Onna-imagawa-himekagami
—Text and Bibliography—

……………Zuike Oshiki*1 &
Toshihide Wakabayashi*2

* 1 城西大学教授・主任研究員

* 2 城西大学助教授

一書誌

二翻刻

所蔵 城西大学国際文化教育センター。

書型 大本一冊。縦二六・八センチ。横一七・四センチ。

表紙 厚紙の上に薄紺色無地の極薄紙を貼る。

題簽 中央。茶色紙四周枠。縦一八・四センチ。横四・五センチ。

百家 をなしまがひめかみ
重宝 女今川姫鏡 全

綴糸 茶木綿糸一本掛。

内題 目次・序・跋ナシ。

丁数 二三（墨付二六面）。

各面 五行。ただし上白に「女中大和詞」「女中嗜ミ草」

「産前産後の心得」「虫ぼしの事」「萬シミ落しの法」。

匡郭 縦二一・六センチ。横一五センチ。

柱刻 ○一〇十三

奥付 大坂書林 大坂心齋橋通 河内屋平七
南□□□町

凡例

- 1 「百家 女今川姫鏡 全」の忠実な翻刻を旨とする。
重宝
- 2 使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるようにする。
- 3 漢字ルビもすべて原本のままとする。
- 4 行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、「一オ・」一ウを以って示す。

女今川の書ハ

何人の作たるを

知らずといへども

古へより世に

行ハれて女子の

誠草となせり

故に稚きより

よく習ひて常に

心にかくるときハ

女の道にかなひて

古への賢女列女にも

恥ざる心ばへと

なるべし



1オ

今川になぞらへて

自をいましむる制

詞の條々

一常の心さしかたましく

女の道明らかならざる事

一若き女無益の宮

寺へ参り樂しむ事

一少き過とて改めず

敗れに至りて人を

恨むる事

一大事をも辨なく

うちとけ人に語る事

一父母の深き恩を

忘れ孝の道疎に

なる事

一夫をかるしめ我を

立て天道を不長事

一道に背きても栄

ゆるものを羨ミ

ねがふ事

一正直にして衰へ

たる人をかるしむる事

- 一遊あそびに長ちやうじ或あるハ座ざ
- 頭あつを集あつめ或けんハ見物ぶつを
- すき好このむ事「三ツ」
- 一短慮たんりよにして嫉妬しつとの
- 心こゝろふかく人ひとの嘲あざわを
- 恥はぢざる事「三ツ」
- 一女をんなの猿利根ざるりこんに迷まよひ
- 万事ばんじにつき人ひとを「四オ
- 譏そしる事
- 一人ひとの中言なかごとを企人くんだての愁うれ
- を以もつて身みを榮たのむ事
- 一衣類道具いゐるだうぐおのれびれい己おのれ美麗びれいを
- 尽つくし召使めしつかひ見苦みくる敷事しき
- 一貴たつとぎも賤いやしきも法ほふある
- ことことを辨わきまへず氣随ひずあ
- を好このむ事
- 一人ひとの非ひをあげ我われに
- 智ちありと思おもふ事「五オ
- 一出家沙門しゆつげしやもんに對面たいめん
- すといふとも側近そばぢかく
- 馴なるる事
- 一我分際わがぶんざいをしらず

- 或あひ騙おぼり或あるは不足ふそくの事「二五ウ
- 一下人げにんの善惡ぜんあくをわき
- まへず召使めしつかひやう
- 正ただしからざる事
- 一舅姑しうとじふめに廉末せんまつにして
- 人ひとの譏そしりを得うる事「六オ
- 一継子まごに疎おろそかにして他た
- 人にんの嘲あざわを恥はぢざる事
- 一男をとこたるにハ縦間近たてへまぢか
- き親類しんるゐたりとも親お
- ミを過すくす事「六ウ
- 一みち道みちを守まもる人ひとを嫌きらひ
- 我われに諂へつらふ友ともを
- 愛あいする事
- 一人ひと来きたる時とき我わが不機ふき
- 嫌げんにまかせ怒いかりを移うつ「七オ
- し無礼ぶれいの事
- 右此條々みぎこのぢうぢう常つねに心こゝろに
- かけらるべき事こと珍めづし
- からずといへ共猶なほもつ以もつて
- 慎つしむべき事こと也先まづ
- 家いへを守まもるべきにハ

志直にして毎時

我をたてず夫の心に

随べしそれ天は

陽にして強く男の

道也地ハ陰にして和く

女の道也陰ハ陽に

順事天地自然の道

理なる故夫婦の道を

天地に譬たれバ夫を

天の如く敬ひ尊ぶハ

是則天地の道也さ

れば幼より心はへ優

しく直なる朋友に

交り仮初にも猥がハ

しく賤き友に近よる

べからず水は方圓の

器に随ひ人は善悪

の友によるといふ事実

なる哉爰を以て能家

を治る女ハ正ぎ事を

好よし申伝る也人の善

悪を知り給ふべきにハ

其人の親む輩を見て

伺しるといふ事あれば

誠に恥き事也家を乱

す女はかたましく氣随

なる事を好といへば朝

夕我と心を願て悪を

去り善に移進べし

五常の理を受けて生れ

たりといへ共或善人と

なり或ハ悪人と替る事

みな幼稚よりの習に

依べし男子にハ師をとり

身を修る道をならハし

むるも有といへ共女とし

ては学ぶ者稀也此

故に女の法あることを知

らず頑く邪に成行こと

誠に口惜次第也いく程

なく他の家に行夫に従

ひ舅姑に仕る身なれば

父母の許に留るハ暫

の内なれば孝行を尽す

事第一也面たいいちに白粉おしろいをかざり髪形かみかたちを粧よそふのミ

にて心こころの曲ゆがみを撓たんとする

人稀也志直ひとまじに食くること

なくハ貧まつしく衰おとろへたり共恥はぢ

ならず邪よこしまなれば富とむといふ

とも智ち有人あるひとに疎うとまれぬ

べし惣そうじて而我善惡わがよしあしを知し

んと思ハゞ夫おつとの心こころ穩おだならバ

我行善わがよと思ふべし忙せわしく

短慮たんりよならバ我心わがこころ正ただしから

ざると知しべし人を召仕事めしつかふ

日月じつげつの草木国土そうもくこくどを照玉てらたまふ

如ごとく心を廻めぐし其人々そのひとに随したがつて

召仕めしつかふべき事也ことなり

終



13ウ

女中大和詞
ぢよちゆうやまとことば

- 一こそでを ごふく
- 一わたを おなか
- 一はな紙がみを おさし
- 一礼家にてハたとふ紙といふ
- 一べにを おいろ
- 一こめを うちまき
- 一ミづを おひや
- 一ミそを おむし
- 一だんごを いしく
- 一ふのやきを あさがほ
- 一とうふを おかべ
- 一きらずを うのはな
- 一しやうゆを おしたし
- 一ぼたちを おはぎ
- 一ゆのこを おゆのした
- 一でんがくを おでん
- 一大こんを からもの
- 一せつかいを うぐひす
- 一かつを、かたく
- 一たこを たもじ

—うを、おまな

—しやくしを しやもじ

—かうの物を かうく

—いわしを おむら

又むらさき共おほそ共云

—ひき飯を ほもじのこ

—かづのこを かづく

—い、鮮すしを つき夜

—するさけを つゆのおつけ

—なべかまを くる

—ふなを やきぶさ「三ノ上白」

—にごいを こひち

—そうめんを ぞろ

—こぬかを まちかね

—ごぼうを にこん

—すりこ木を こがらし

—にぎり飯を むすび

—こんにやくを にやく

—ちさを おはいろ

—しやくしを おさんだねこ

—ぜにを おあし

—わらび餅もちを わうのかちん

—かみそりを おけたれ

—つくぐし つく

—うこぎを うのめ

—のりを のもじ

—升ますを よはら

—しほを なみはな「三ノ上白」

(挿絵、略)

—ひやむぎを きり

—かななべを かんくろ

—いかきを せきもり

—さけを さゝとも

又九こんともいふ

—あまざけを あま九こん

—こまめを ことのほら

—なすびを なす

—白しろはしを ねかしのはし

—杉すぎばしを かうがいのち「三ノ上白」

—松まつたけを まつ

—竹たけの子こを たけ

—ひしほを あなむし

—ぬかミそを さうちん

—しんこを しらいと

- 一 ねることを おしづまる
- 一 おきるを おひんなる
- 一 かみ洗を おぐしすます

女中嗜草
おんちゆうたしなぐさ

女中ハつねぐもちゆる
 調度の多き中にも最
 ともたひせつにすべき物
 ハ鏡なり生れつきの
 美悪ハ是非なしわが
 心の善悪の顔色にあ
 らはるゝをてらし見て
 よろこぶ時といかる時
 のいづれかまさりおと
 りせらるゝといふ事を
 見習ふべし唐土にて
 ハ黄帝鏡を鑄始玉ひ
 本朝にてハ神代の其
 むかし石凝姫命天高
 山の命をもつて八咫の
 鏡を鑄玉ふなり神

代の宝物も鏡を第一
 とす是神の神舎を
 表するものなれハす
 いぶんくもらぬやうに
 折々磨ぎたいせつに
 し玉ふべし
 ○鏡のいえの新しき
 に鏡を入れバくもり早
 きものなり砥の粉を水
 にて解て鏡の家の中
 にぬりてしバラくして
 拭ひ去かくのごとく三度
 ほどすれバうるし気よ
 くさるものなり
 ○鏡ときの法
 水銀一匁 錫三分
 先かわらけを火にかけ
 て錫を入とけたる時に
 水銀を入よくくませ
 あハせ猪口にたくはへ
 置べし磨時ハ鏡を
 との粉にてふき油氣

をよくくミがきおとし

梅むきの酢すを引ひて合

せ置したる水銀すいぎんを少し「四ウ・上白

ばかり指ゆびのはらに付つて

鏡かがみの面おもてをすり其そののち

もめんもめんの切きに羽は二重ふたえの

絹きぬをしつかりとつゝミひた

しとぐべし

○櫛くしハ髪かみのかざりに

あらず常々つねづね髪かみを櫛くしけ

づれば頭かしらのうつねつを

さまざまぞ文甲べつかうのくし

ハ風邪ふうじゃをのぞくのこう

ありもろこしにてハ禄ろく

晋氏しんし作り本朝ほんちょうにてハ

伊弉いざ諾な尊そん湯津とうづの爪つま

櫛くしを投な玉たまふ事ことあり

埴土つひのむじ老翁らうおうより玄櫛くしの事こと

あれハ神代かみよよりも

有来ありきたりしものなり黄わう

楊やうの櫛くしハいにしへより「五オ・上白

もちひしにや万葉まんえうし

うにつげのおぐしとよ

ミたる哥うたあり

(挿絵、略)

○あたらしき櫛くしハ髪かみ

の袖そでに二三日にさんじつひたし置

て用もちゆべしかくのごとく

にして遣つかへハ垢あかたまら

すくしあたりもする

どならずにてよし「五ウ・上白

○文甲べつかうの反そりたるを直なほ

すにハ火かにてあつく成なる

ほどあたゝめうつくしく

けづりたる板いたのうへに

のせ置おきて同おなじやう

なる板いたにてじつとおし

つけ置おきべしなほる

なり

産前産後の心得

二三ヶ月経水きたらず
くわいにんにきハまる
ときハむねわるくゑ
つき出かしらふらつき
かねつすこれをつわり
といふくすりもちゆる
におよバス月をこゆ
れバなほるものなり
十月の間ハ身のつゝしミ
第一なりミにあしき
事をきかず目に悪き
色を見ずはなに悪き
臭ひをかゝす口にあし
きあぢはひをしよく
せずたちゑおきふし
たゞしくいかりうらみ
おどろきうれへの事
をつゝしむべし心正直
にしてしづかに身を
つかふべししげくは

「六オ・上白

たらくべしたかき所
の物手をのばしとる
べからずおもきものを
もつべからずあしをかゞ
めて臥へしかくのごとく
すれバ産やすくうま
るゝ子具足にして才
智かしこしくわいにん
をしるにハ川草を粉
にして一匁もぐさのせ
んじしるにてのむべし
其日腹のうちすこし
うごくハくわいにん也
うごかずハくわいにん
にあらずやまひなり
又よき酢にてもぐさを
せんじさかづきにはん
ぶんほどのむべし腹
のうちしきりにいた
むハくわいにんとしる
べしくわいにんの中
よるしきくひもの

「六ウ・上白

「七オ・上白

大むぎ、あわ、大こん
ごばう、くろまめ、い
ちご、うこぎ、くこぜ
り、うど、山のいも、
こひ、がん、くらげ、い
か、にんじん
同よろしからぬもの
なし梅、桃、すも、
あんず、くわい、くず
のこ、ひともじ、めん
るゑ、まめ、もち、
くさ□□□□のね
いたどり、ひしほ、こ
んにやく、しゞミ、鮎あゆ
ゑび、さけ、酢、鱈なます
かも、はと、すゞめ、
こんぶ、どぜう、たこ
ふな、川魚、かたき物
くさき物、油氣あぶらけの物
うろこなき魚、五月
めハたいないにてかた
ちそなはるものなれば

帯おびをするなり三献さんけん
のいわひ有てのち吉きつ
方にむかひてすべし
産はらにのぞんでの心得
ハねがへりするたびに
腹はら一ひとしきりくにしわ
くといたむ也はら
いたミてもこしいたま
ざれハ産ますべきに
あらず物にとりつき
人に手をひかれて
座敷ざしきをしづかにあゆ
むべしさすれハ腹はらの
うちくつろぎねがへり
しやすしすでにかミお
としてのち其ま、安あん
神散じんさんをもちゆべし
すをかき目をとちで
たかう物によりか、り
ひさをたて、あしをのべ
す内々むねより腹はらへ
なでおろすべし久し

くねむらず久敷寝

ぶらバそろくおこすべし
きうにおこすべからず

しらかゆをたびくにし

づくふべし七夜の

うちなまざがなくふ

「ハウ・上白

べからずすきまの風に

あたるべからずなきかな

しむべからずおどろき

おそるべからずせいしん

をつくすべからすねつ

あらバ腰湯を遣かふ

べからずはやくかミを

とくべからずはやくぎや

うずいすべからず早く

つめをとりはをせ、

るべからず

(挿絵、略)

産後「九オ・上白によるしき食物

かゆ、ひともじ、くら

け、はも、こひ、とび

うを、うなぎ

産後あしきくひ物

なすび、うり、わらび

たで、いも、そば、

こんにやく、なし、か

き、ちさ、にんにく、

こせう、さんしやう、

あづき、きのこ、こん

ぶ、めんるゑ、す、酒

たこ、鯛、なま冷物

油「九ウ・上白けの物総じて生

肴ハよろしからず

虫むしぼしの事

「九ウ・上白

夏のころ入梅とてあめ

ふりつゝ事あり雨晴

てのち書物を日にさらす

へし水おさむる事午

ひつじのこく暮におよ

べバタだちのうれい

あるゆゑはやくとり

のさむべし書物の間に

七里香ひちりかうを入置いれべしむし

くはぬ也今いまいてうの

葉はをいる、事ことあやまり

なり芸香うんかうといふ物銀い

杏あんの葉はに似にたり是こゝろも

むしをのくるものなり又

麝香じやかう樟腦じやうのうなどを入いる

是こゝろもよし土用中どようちゆうに衣い

服ふくをさらす事こと尤なほよろし

入梅つゆのころ打うちしめりたる

衣いしやうをそのま、置おけ

バかびあるひハいろかハる

事ことあるものなりこゝろに

かけてさらすべし羽はぶた二

重へのいるるひさしく晒さら

すべからず色いろのいしやう

もへぎくれないむらさき

など日にさらせばいろ

かわるべし

萬よろしミ落わたしの法ほふ

白無垢しろむくを洗あらふにハたう

腐ふの湯ゆをわかし小豆あずきの

粉こなを入いて洗あらふべし又大

根こんのしぼり汁じゆにて洗

ふもよろし

○雨あめのもり衣類いるいを

けがしきハ付つたるにハふ

のりをたきとろかし揉もみ

付洗つけふべしあとなく

落おちるなり

○多た葉粉はふこなの脂あぶらのつき

たるにハ煙草たばこの吸すがら

をもミつけあらふへし

きめうなり

○鉄醬てつじやうの付つたるにハ米こめ

の酢すをあつくわかしす、

ぐべし

○血ちの付つたるを落おとすにハ

生姜しやうがをうすく片へて上うへに

おくへし残のこらばすひ取

なり又あづきのこを
もミ付て洗ふもよし

「十二才・上白」

(挿絵、略)

○洪しほの付たるにハ白

砂糖さとうをもミ付あらふ

へし又味噌みそしるにて

洗ふもよし

○とりもちの付たる

にハどぜうのぬめり

にて洗ふべし又山のい

もをよくすり水にて

ゆるめ洗あらふべし

○うるしの付つたるにハ

ミそ汁しるをせんじさま

「十二才・上白」

して洗ふべし又ふのり

にて洗ふも好也

○酒のしミたるにハ

明みやうばんみつ凡水みづにて洗あらふべし

○油あぶらのかゝりたるにハ

くわつ石せきの粉こなをふり

かけあつ紙かみをそれへ

あて火あたまのしをかけてよし

又紗綾さやりんず綸子羽ふたあ二重

に油あぶらかゝりて洗ふことも

なりかたきものには

こゝにふしきの妙法めうほふあり

油あぶらの付たる所ところを板いたに

張置はりまはし柱はしらへたてかけずる

ふん古ふるき杓しやく子こにて水

をすゝひてひたとかけ

流ながすべし奇妙きめうに

「十二才・上白」

おちて地ちそんせす去まう

ながらあたらしき杓しやく

なバ切きなしするふん

ふるきしやくしを用もち

ゆへし神妙しんべうのほふ

なり

○墨すじのつきたるには

たいていハめしつふにて

もおつれとも半夏はんげの

粉こなをもミ付てふくミ

水みづにて洗あらふかよし

○藍染あいぞめをぬくには

石灰いしはいを水みづに入いひたと

煮るべし

○茶染をぬくにハ水

と酒とを合せてにれ

ハいろしろくなるなり

「上二ウ・上白

○かうやくの付たるに

ハ酒のかすをミづにて

ときよくもミつけて

あらふべし落ることめう

なり

○小袖のかびたるにハ

かもうりのしるにて

洗ふべし其あとへび

わのたねをこまかに粉

にして水へいれあらへバ

其まだらおのつから

なをるべしまた梅の

葉をせんじ洗ふても

よし

○ゑりあかの付たるハ

ミづとりの緞にて

すりつければあぶら

「上二ウ・上白

あかもちにつきて落

る事めうなり

(挿絵、略)

○畳に酒のこぼれたる

にハおもとの葉をすり付

ぬぐふべしその跡を木

綿の切をぬらしてふく

べしあともつかず又

とうふの湯にてふき

てもよし

○魚鳥の油つきたるハ

かぶらの汁にて洗ふべし

終

「上二ウ・上白